

### 東畑精一先生追悼号に寄せて

東畑精一先生のことを考えると、必ず浮んでくる人物はシュムペーターである。先生は彼の『経済発展の理論』の共訳者であったし、また大著『経済分析の歴史』（邦訳書 7分冊）の訳者だったからだ。あの大著を手にすると、瘦身の先生のどこにこの大著を訳されるエネルギーがひそんでいたのかと、驚嘆せざるをえないものがある。ところで、ボンでシュムペーターに師事されたとき、東畑先生は師シュムペーターに「くつついて離れなかった」といわれているが、「先生（シュムペーター）もまたわたしを捨てなかった」と述懐される。いつか私に「シュムペーターは僕を愛していたんだよ」と冗談を言われたのは、忘れえない印象の一つである。

ところが、そのシュムペーターが若いころ、つねに机上においていた本が二つあった。ワルラスとマルクスがこれである。一方ワルラスへの傾倒は『本質』を生む結果となった。他方マルクスの歴史動学が与えた最初の魅力は晩年『資本主義・社会主義・民主主義』として結実した。その意味でシュムペーター体系にはワルラス的純粹さと同時に、マルクスの歴史的な歴史性が伏在していたといつてよい。と同時に、歴史派を批判していながら、シュモラーやミッチェルの実証的な分析にも大きく惹かれる何かがあったようだ。

なぜシュムペーターが東畑先生を可愛がられたかは知る由もない。一つは先生のもつ破格の人柄のためであろうが、もう一つは、将来農業という実際畑から育とうとする有為の若い学者に特別の関心を抱かざるをえなかったためかもしれない。多分、師シュムペーターが、シュモラー、ミッチェル、マルクスに一目をおいていたのと共通の心理が東畑先生にも働いていたと解釈できないであろうか。

かつて大内力氏との対談で、

大内 だいたい日本でも農経畑から出てきた農業経済学者は……。

東畑 泥くさいでしょう。（笑）

大内 経済学プロパーから出てきたのは、……。

東畑 スマートでしょう。（笑）

という一節があるが、しかしその東畑先生はどちらかというと他の農経学者に比較するとスマートに見える。しかし、シュムペーターからみると、泥くさくみえたにちがいない。泥くささ（特殊性）とスマートさ（普遍的純粹）は、シュムペーター・東畑のラインを辿っ

ていくときに、およそ学問がいつの世にも共有しなければならない二つの側面のように思える。人によってその組み合わせ方は違うかもしれない。したがって、泥くささの濃度が低いシュムペーター先生が、その濃度が高い東畑先生を可愛がったことも、私にはわかるような気がする。

アジ研（アジア経済研究所）の性格としては、高度に泥くさくなければならぬし、創設者東畑先生はそれを狙われたとあってよい。しかし、その目標はすでに相当程度において達成された。アジ研のユニークさは泥くささを排除しては考えられないくらいになってしまったとあってよい。しかし、急速に縮小を続ける現代世界を念頭におくと、東畑先生自身が持っていたもう一つの側面、「スマートさ」を引き出し、これを「泥くささ」と結び合わさねばならない時期にわれわれはぶつかっているのではあるまいか。私はふとそのように思わざるをえない。

長い間に、アジ研では沢山の研究業績がつみ重ねられてきた。だが、ちょうど比較経済体制論、比較経済発展論、比較文化論などがありうると同様に、私には「比較第三世界論」ともいべき分野がそろそろ登場してきてよい時期にきているのではないかと思われる。第三世界はもちろん一つではない。アフリカと南アジア、東南アジア、ラテンアメリカはいずれも違う。その違う所以をアジ研的泥くささのなかから浮びあがらせるというタイプの研究がいずれできてくてもよくはないだろうか。しかも、そのような研究を浮びあがらせうところは、アジ研を措いて他にない。アジ研の研究者がそのような自負を持つときに、アジ研的泥くささが、新しいアジ研的スマートさによって“aufheben”されるようになるのではあるまいか。

昭和59年5月6日

篠原三代平  
（アジア経済研究所会長）